

【春日野】かすがの

春日野にて

かすがのにおしてる つきの ほがらかに あきの ゆふべ となり にける かも

春日野・若草山の麓より西の方一帯の平地をいふ。古来国文学の上にて思出深き名にて、今も風趣豊かなる実景なり。 会津八一『自註 鹿鳴集』より

春日は現在の奈良県奈良市春日野町一帯の地名で、広義には平城京の西、奈良市街地から若草山の西麓まで。北は佐保川、南は能登川までの台地をいいます。狭義には春日神社一の鳥居より東、現在の奈良公園、興福寺、東大寺を含む一帯をいうようです。奈良時代であれば平城京の東部に当たるわけです。

春日野は春日の野という意味で、類語には春日の里(春日の郷)・春日原・春日の野辺・春日山などがあります。建築の規制が厳しいため現代でも野原が多く、春日野という言葉は実態をとめない生き続けています。

阿倍仲麻呂の歌で知られる三笠山は春日野の東端、若草山連山の一つです。

連山には三笠山(御蓋山)のほか若草山と古くから呼ばれる山がありますが、これら名称がどの山に該当するのか地元の人も、観光地図も一致しないことがあります。時代によって異なる名称で呼ばれていたようで、混同したまま今日に至ったようです。

春日[カスガ]は地名の箇須我[カスガ]の枕詞である春日[はるひ・春の日がかすむの意]がそのままカスガと呼ばれるようになったものです。枕詞の文字が地名の音で呼ばれるようになった例は多く「飛鳥」「近江」「長谷」などはよく知られているところです。

和銅三年(710)平城京遷都にともない藤原氏は氏寺をこの地に移し(興福寺)、氏神を春日大社に祀りました。さらに東大寺など大規模な官寺の建立により、この地は仏教の中心地へと変貌していったのです。

春日大社は御神体のひとつである鹿島神(武甕槌命タケミカヅチノミコト)を藤原不比等が茨城県の鹿島神宮から御蓋山に遷して祀ったことにより始まります。

このとき神を白鹿が当地まで移したといわれ、鹿は今でも神の使いとしてこの地で大切にされています。

遷都後の平安時代になっても興福寺は藤原氏の隆盛によりさびれることはなく、僧兵の勢力は叡山と双壁であったようです。

興福寺は薪能発祥の地であることも、この地に茶趣を求める者にとって忘れてはならないことでしょう。

春日野は万葉時代から絶えることなく歌に詠まれてきました。

『万葉集』では特に特定の季節・風物と結びつくことはなかったようです。

・夕立の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ 『万葉集』作者不詳

平安時代も中期以降、春日野は歌枕として定着し、「春」の字から春につながる若菜つみ・雪間・下萌などに絡んで登場しています。

- ・春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ 『古今集』 紀貫之
- ・春日野の下萌わたる草の上につれなく見ゆる春の淡雪 『新古今集』 源国信

近代に入っても春日野は詠み続けられます。

冒頭の歌に続いて、秋艸道人会津八一の歌をいま一首ご紹介しましょう。

- ・かすがの の みくさ をり しき ふす しか の つの さへ さやに てる つくよかも

『南京新唱』 会津八一

八一は歌をひらがなで表記します。八一は仮名文字が興った平安時代の一文字一音の表記に立ち返っています。

さらに遡れば、和歌の始まりは文字ではなく口伝耳受であったはずです。試みにこの歌を漢字で表記してみましょう。

- ・春日野のみ草折り敷き臥す鹿の角さへ清に照る月夜かも

活字を読む上においては漢字かな混じりの方が読みやすく意味も取りやすいかもしれません。しかし、歌の命は調べです。

八一のひらがな表記は調べを味わうための音譜と私は解釈しています。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~